<書評論文>

進化論／聖書解釈／集団的記憶

—南アフリカ人種主義の基底的合理性—

Saul Dubow,
Scientific Racism in modern South Africa.
(Cambridge University Press,1995)

阿部利洋

1　人種理論への玄関口

南アのアパルトヘイトは、その実態があまりに強烈でセンセーショナルですらあったために、ときとして感情的にのみ解釈されてしまいがちである。「集団的狂気だ！」。しかし、本書の考察対象である人種主義は、アパルトヘイトという政策ではない。アパルトヘイトは、人種主義という、人間集団のグループ分けをする論理システムのひとつの表出にすぎない。どのような表出がみられるかは時代状況によるだろう。つまり、過去の表出にたいして、現在一般的な価値判断——人間誰もが平等な権利を持つのは当然ではないか——をもって、「彼らは誤った意識にとらわれていたのだ」「植民地下という状況で資本家に煽動されていたのだ」と済ませるよりも、かつてのグループ分けを可能ならしめていた論理にどのような筋が通っていたのか、それに時代状況的な変換をかければいまなお流通しうる論理はあっただろうか、そういう視点が必要とされる。事実の反復はありえないが思考パターンの変奏はありえよう。

デュボウ（S.Dubow ）は言う。「他の多くの社会と比べて、本当に南アがより人種差別的といえるのかどうか？人種による優劣という意識が国際的に正当性を失いつつある時期に白人の優位性を法定していったために、非難の的となっているにすぎない」（p.19）。

可視的な身体的特徴から人種区分をすることはもはやフィクションにすぎないにも関わらず、「人種」という言葉のもつ響きはどこかしら決定的な確たる実体を感じさせると同時に、暗黙の説明タームとしてありふれたものになっていることも事実であろう。そこでは、「言語、信仰、文化的習慣、あるいは心理的性格や気質、さらには肉体的俊敏性やリズムやスタイルといった身体的特徴などの人間のあらゆる差異が、つねに最終的に「人種」という曖昧な分類指標によって説明されることで奇妙な落ち着き先を見いだしてゆく」〔今福：1994〕。その概念の曖昧さは、ナチスのユダヤ人に対する、マレー人の華人に対する、日本人の在日朝鮮人に対する、正確には民族差別というべき事象をも人種差別と呼ばせたりする。そして「日本人」という単一民族のフィクションが現実にはノンーフィクションとして機能しているように、南アの人種問題においても、「人種」概念の出所である生物学とは別の社会的な規定——「何らかの身体的・文化的特性ゆえに異質と規定される集団」——が実際社会のなかで機能しえた状況と論理を見ていかねばならない。

人種関係の概念もエスニシティと同様に、

本質論から生成論へとシフトしているのが社会科学におけるパラダイムの趨勢であろう。しかし、従来多くの論者が、生成の構造的要因・社会的条件の追求にかたむくあまり、結果として「概念の帰属」に囚われてきたことは否めない。そのようなスタイルに疑問を呈し、人種という概念を生きる人間の論理に踏み込んだ本書は、さらに、人種という概念が「人間」をいかに生きる＝変化していくのか、という視点の転回から、問題枠組みの多義化へ誘う契機をも提供している。

2　人種理論の説明体系

2－0　本書の指向

著者デュボウは、サセックス大学アフリカ・アジア研究科で歴史学を受け持っている。近代南アフリカ史を専門とし、"Racial segregation and the origins of apartheid in South Africa"等の著書がある。しかしその守備範囲は歴史学にとどまらない。心理学・自然人類学・生物学等の知見を駆使した「人種」へのアプローチは、それを過去の事実としてではなく、知識そのものへの問題視角をも汲み取れるものとして捉える点において、とりわけ社会学・人類学の分野にインパクトを与えている。

膨大な資料を渉猟した、8章から成る本書の構成を大きくふたつに分けると、1)自然科学・生物学を軸にするものと、2)聖書解釈・ナショナリズムを軸にするものとに分かれる。南アの人種理論が強力に浸透していく過程では、上の二つ、さらには後者2)を分けた計三つが互いに結びつきながら展開したことが、その動因であったことは疑いない。が、それぞれの理論の彫琢に焦点を合わせるうえで、あえて別個に整理したい。

デュボウは南アのここ20年の歴史研究を通覧して、良質なものが多いとはしながらも、「ややもすると黒人のために白人が語る」風潮のあることに批判的なスタンスを取る所から始めた（p.5）。冒頭に、関心の置き所が「人種差別の事実」であるよりは「人種という概念」にあることを述べ、より具体的には「人々の間の異なるグループ同士におこる、本質的な生物学的差異と優位性という考えがいかにシステマティックに現れ、合理化されるのか」と問いかける。そしてまた、「人種」が科学的に客観的存在ではないことを追求するよりも、社会的・知的な産物とされる「人種」が今世紀のほとんどを通して、いかにリアリティと持続力をもちえたのかを明らかにしようとする。「必ずしも同一化することなく、われわれの集団的過去を詳細にする」ために彼がとった戦略である。近年の南ア史研究において隙間風を吹かしていた今世紀前半（19世紀後半から1950年代）の「学際的」人種理論。そこを埋めることで、デュボウの意図はパイオニア・ワークとして結実した。

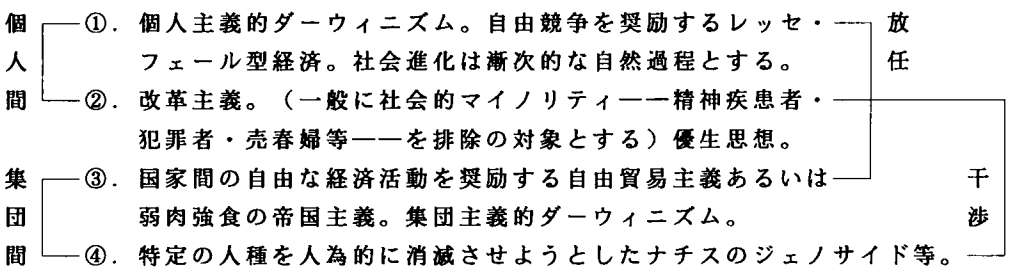
2－1　生物学的決定論と優生学

社会ダーウィニズムや優生学は、ダーウィンの『種の起源』（1859）に端を発する進化論の社会的ヴァリエーションといって差し支えなかろう。もっとも、ダーウィン進化論は単に生物進化の概念だけからできあがったわけではなく、西洋思想のいくつかの潮流――マルサスの『人口論』やアダム・スミスの国民経済学など――が、19世紀なかばのイギリスで合流して生まれたことが明らかにされている。1900～30年代初頭は国際的流行として優生学がもてはやされた時期であり、南アに

おいても、社会を有機体とみて政策に介入しようとする生物学者や、疾病を遺伝から説明（解明ではない）する遺伝学者が頻出し、優生思想が人種主義の先頭を切って走っていた。優生思想は社会ダーウィニズムの一表現であり、最も明確な顕現といえよう。ここで、社会ダーウィニズムと南アにおける優生学の関係を整理してみたい。

つの解釈が成り立つ。

ケープタウンの知識人たちは、「われわれ－彼ら（原住民）」関係の根拠が必要とされる状況で、集団主義的ダーウィニズムによって、もとの理論が対象にした性質を反転させながらもダーウィニズムの骨子（適者という概念と進化というベクトル）を用いることに成功した。「生存競争・適者生存」概念から



この類型化が与える視座は、図中左側にとった「競争・淘汰」のメカニズムを集団に適用する場合、保存されていく個人の性質について、そのメカニズムのイメージとは正反対の特質を挙げることが出来るというものだ。つまり、「個人主義的にみるなら、淘汰の結果保存されるのが、個人の生存に有利な変異、すなわち個人間の競争に勝利をもたらす利己的特性であるが、集団主義的にとるときの個人レベルで考えてみれば、それが、犠牲心、信頼感など個人間の協調・扶助を促進する利他的特性といえる。」〔鵜浦：1991〕

南アのアフリカーナーによる人種主義の展開は、まぎれもなく上図の④にあたるものだが、デュボウの指摘――「自然科学的人種主義に貢献したケープのアマチュア知識人サークルは、20世紀初頭から、社会ダーウィニズムのイディオムを用いて南アの現実を理解しようと試みていた」（p.130）――から、ひと

経済的には不適者扱いされてしまうはずの下層白人（主にアフリカーナー）をすくい上げ、かつ、グレート・トレックの集団的記憶に団結するvolk＝アフリカーナーダムへの愛着や、クリスチャンであることの心性に矛盾することなく、全面競争を避けた上での「社会適者」資格を科学的にバックアップすることが可能になったのである。個人レベルにはたらく意味合いを変化させて、集団レベルで社会ダーウィニズムを適用したことは、当時の南アの社会状況に照らして巧みな選択だったといえる（もっとも、それゆえにダーウィニズム自体の一貫性は失われてしまったが）。

人間社会にも適者生存の法則がはたらいている、という「考察」を超えて、適者生存でなければならない、という「価値」としてダーウィニズムが受容されるなかで当時、不適応者として抽出されたのは、都市化されるアフリカ人、下層の白人女性、精神薄弱者であっ

た。そこではあからさまに不適応因子の排除が語られたわけではなく、社会健常度／社会の活力を向上させるためという目的のもとに、具体的手段として犯罪学理論と出産制限（断種）が、優生思想遂行のために使用しうると吹聴されたのである。

2－2　クリスチャン－ナショナル・イデオロギー

従来、アフリカーナーに肯定的な者も否定的な者も、彼らについて、勇敢な開拓者であり、頑固なカルヴィン派原理主義の継承者であるという点では一致していた。そしてアフリカーナーの言説に他に還元しえないイデオロジカルな要素を見いだすとき、（自己の属する社会的価値からして）アフリカーナー・ナショナリズムは根本的に非理性的なのだ、と結論して議論の幕を下ろしていたのである。

それに対してデュボウは以下のように反論する。1．アフリカーナーの集団的狂気によるアパルトヘイト、という片つけ方は外から見たもの。内部論理の一貫性を見なければならない。2．南アのネオ・カルヴィニズムは過度にアパルトヘイトの責任を負わされているが、それ自身は決してアパルトヘイトの青写真を都合よく与えたものではなかった。ネオ・カルヴィニズムの解釈を明確にする必要がある。

そしてこれらを明るみに出すことは、西洋科学の新知識・プロテスタントの教義・国際的なヒューマニズム、等の「価値の圧力」に面してなお、アフリカーナーの信念を堅持させうる説得力が何であるのかを知ることである。

クリスチャン－ナショナル・イデオロギーの中心人物は、クウィペール（Kuyper）とデュトワ（J.D.Du Toit）である。デュトワの聖書解釈の核を簡潔に整理するなら、神を偉大な分割者としたことになろう。バベルの塔の例をもちだし、ひとつのネーションを築こうとした塔の建設者たちに互いに理解できない言語を割り振ることによって、神はそのこころみを妨害したのだと指摘するのだ。アフリカーナーは、その点、自分たちのネーションをつくることで神の意思を実現しようとする――イギリスに頓挫させられた過去の建国と強引なホームランド建設にネーションへのこだわりを見て取ることが出来る――。デュトワがひきだす結論は以下のふたつである。神が合わせたものを分けてはいけない（volk）。神が分けたものを合わせてはいけない（多様体、volks）。

デュトワのアイディア・ソースがクウィペールである。彼はオランダ・ネオ・カルヴィニスト運動の二代目リーダー（1876）として、啓蒙主義・フランス革命・個人主義・インターナショナリズム・リベラルヒューマニストに反対し、「各局面における主権」をキースローガンに掲げた。国家、自治体、教会といった異なる実在レベルにあるそれぞれが、神に従属しつつ、ある程度の自律を享受する。それにより、教会と国家との分離を維持しつつ、生のすべての面に神の力を主張することができるのである。クウィペールとドイツのvolksnationalistの見方は、同じロマン主義的な遺産を、その文化的理想主義と反合理主義のなかに共有している。ともに文化とネーションフッドの有機的なつながりを強調し、個人の創造性はグループの集合性を通してこそ最もよく表現され、ネーション自身は神聖なる歴史的運命に従属している、と信じる。

にもかかわず、ネーションを理想視するドイツロマン主義の傾向は、究極の主権を神に

おくネオ・カルヴィニズムとは相いれない。この点で、オランダ改革教会の穏健派神学者であったデュ・プレシスはナショナリストであるニコ・ディートリヒ――「人が自己を充たすのはネーションを通してのみであるが、ネーションは人がつくるものではなく、神に意図されるもの」――を批判していた。しかし、デュ・プレシスの教授資格が1930年の異端審問で取り上げられると教会内部の様子は一変し、神学的にではないにしろ、アフリカーナーの伝統と歴史に照らして分離の正当化が図られ、個人としての人間から集合的単位としての人間に強調点が移されていったのである。

アフリカーナー・ナショナリズムにとって理論的には厳密さを欠くとはいえ、神が多様体を定めた（各局面＝各人種における主権）とすることで、差異は必ずしも優劣を課すわけではないと主張することが容易になった。分離発展に関する、オランダ改革教会の消極的支持の基盤が確立するのである。そして、多様体の単位としてのvolkと結合する文化の名において差異を説明することは、人種形質や血統にのみ依らずにすむ利点があった。volkの根拠が血であっても、それと等価の文化を説明原理にするとき、その根拠を隠蔽することができたのである。

オランダ改革教会の姿勢を変化させる要因となった、アフリカーナーの歴史的経験の語りは、差異化するアイディアの強力な正当化装置として感情的に働きかけると同時に科学的根拠をも付加された。過去から現在へと連綿と達成されてきた連続性と目的志向性の感覚は、現在の不安を払いのけ、未来への直接行動を助ける。語りつがれる記憶を科学によって称揚する、明確な例としてデュボウが挙げているのが、アフリカーナー史の人気作家グスタフ・プリレール（Gustav Preller）の著作である。彼にとって科学とは「アフリカーナーの直観を確認するもの」である。「科学は、やっと最近になって、ヨーロッパ人とバンツー人の脳に顕著な物理的格差があることを発見しつつある……生得的なその違いは各々の知的能力の基準を作らせる。しかし、100 年前のボーア人がその性質の違いに気づいていたとは驚くべきことだ……3 世代前のボーア人はその科学的知識を持たなかった。にもかかわらず、違いを深く受けとめていた彼らはすべてを平等のもとに並べることを拒んだのである」（p.268）。先祖の発言・行為を現在の科学的知識をもって正当化しながら、前者のうちに既に後者のエッセンスが先取りされていたとすることで、前者の根源性を優位性に転化し表象する。理性的・科学的批判が、「集団的記憶」「常識」を越えることがなかったのも、歴史的堆積をはみだす知識自体を等閑視するが故であったのだろう。

ここまできて、クリスチャン－ナショナル・イデオロギーのハイフンに改めて注意を払おう。アフリカーナーの文脈におけるクリスチャンとロマン主義的ナショナリストは、「正しいもの／価値の源泉」はすべて過去にあり、その「叡知」をいかに現代に適応させていくか、と始める姿勢で一致している。彼らは差異を問いつづける。「われわれ」意識は関係性の産物である。そして、人種形質の差異は現在の関係性から説明することができないゆえに「なぜ」を突き詰めれば何かを前提する以外にない。アフリカーナーにとって、その前提が「聖書」であり「記憶」であった。それらは解釈次第で、現在の新知識や、さらに説明不可能な現象までをも納得させてくれるものであった。しかし、解釈（意味付け）するものとされるものを実体的に区分する思考

は、分割者たる神が聖書をも多様体に定めたとするまでには徹底しなかった。物体としての聖書の記述とグレート・トレックの生々しい経験は、彼らにとって実体以外の何物でもなかったのだろう。アイデンティティの両面である差異と結合の妥協点を実体的過去によって正当化するところにこのハイフンは成立したが、そこには同時に、ハイフンが持つ現代的なふくみ――「本質」への抗いがたい収束――をもうかがえるのである。

2－3　本書の射程

以上とりあげてきた理論の成立背景として、デュボウはまず、1900～30年代までは「国家的能率」のカルトの時代であり、強力なテクノクラシーが発揮され始めたことをあげる。

そして、文化的相対主義と人種的決定論の微妙な混ざり具合がクリスチャン－ナショナリズムのアピールの強さを支えたとしたうえで、さらに、人種的決定論の実践的表現である優生学が、その生物学的用語によってネーションが想像されうるひとつの手段であったことにも注意を向ける。南アにおける専門的な学問的（生物学、神学、犯罪学、精神医学等）コミュニティの創造は、20世紀初頭という時代に南アが置かれた社会状況でなされた、ネーションとしての自己主張／発見のプロセスであったのではないか、と言うのである。

あえてひとつ本書の限界――デュボウの望遠レンズがゆえにはらんでしまう困難――を取り上げるならば、彼が詳細に発掘した人種主義の論理体系が、どの程度社会性をもって浸透していたのだろうか、という問いをおあずけにしている点であろう。それについては、彼自身も述べている。「自らの社会的優位性を合理化しようとする白人大衆にとって、科学的な議論に直接触れることや、詳細を理解することは必ずしも必要でなかった。人種主義を正当化する一群の知識があることを何となく知っていることで十分だったのだ」。人種理論のおぼろげな知識が一般大衆の人種主義的態度を助長し、それがまた人種主義理論家にニーズとなって跳ね返ってくる相互作用のなかに人種主義のリアリティを置いてみるなら、受け手側の人々は、曖昧な人種理論の存在に対し、明確に言語化されない、どのような日常の論理をもって意味付けしていったのか。人種主義の理解に残された課題である。

3　隠れレイシスト

南アのアパルトヘイトを「集団的狂気」と表現すること。それは、「こちら側」からわけのわからないものを、「狂気」というレッテルを貼りながらビン詰めして陳列することによって、<なぜ>それほどまでに強力であったのかという問いから逃げだすことを意味する。<なぜ>を放棄しつつ決定的な態度をとるその図式は、アパルトヘイト支持者たちの態度の裏返しといえようか。筆者の繰り出す膨大な資料をひとつひとつ追体験していくとき、各国から非難されてきた南アを特別視すること自体が、自らもその一端を担っている論理を隠蔽しているのだと気づく。

しかし、問題はより困難なものであるのかもしれない。まず、<なぜ>を放棄していたのは単に楽な選択をしていたわけではなく、そうせざるを得ないところがあったというものだ。つまり、アパルトヘイトの強力さの基盤にある人種主義リンク――宗教－科学－経験の三位一体――は現在われわれの生と世界観に最もリアリティを与える論理構造であるために、自らの依って立つところを解体し尽

くせないのである。そしてまた、分類と価値評価に関する困難だ。「何かが単に存在すると主張するものと、それがどのように扱われるべきか、あるいはそれがよい、美しい、神聖なものであると主張するのと、違いはない…社会的なものからなる世界では、「これは何か」という問いと「これに対してどのように感じどのように行動すべきか」という問いを区別する、「科学的」な技術は未だ開発されていない。」〔レックス：1983=1987〕

人間のなかに区分を意識した時点で評価をも含んでいる。具体的に膚の色で差異化する場合を考えれば、まず「黒・白・黄」があって後から意味付けしたわけではなく、「黒・白・黄」の違いは意味付けとともに出現した。それゆえ、例えば、人種研究においてしばしば提示されるアメリカとブラジルの人種観――膚の色をルーツと結び付けるアメリカと、多様性の顕現として細かく分類し、かつ社会的地位と結び付けるブラジル――の違いについて、アメリカのそれをより決定論的だとして否定的評価を下したとしても、そこには「人種」の存在を前提にして、意味付けのみを操作しようとする態度が浮かび上がるのだ。そして、アメリカにしろブラジルにしろ、その「人種的知識」は絶えることなく受け継がれていく。これはジェンダーの問題と似て、ほとんど無意識の領野において世代間で再生産されていく概念（はじめに差異ありき）であるため、自己のうちに身体化された概念を取り出すには痛みを伴わずにいられない。他者XをX´としてではなく、Yとして認識しなおすこと。そのとき、認識する主体たる自己像もまた、否応なしの変容を被っているに違いない。果してこれがどこまで可能なものなのだろうか。

グルーピングの合理性／論理性を把握して、さて、では何がそこに優劣評価を伴う合理性をもちこむのか？このレベルのより根源的な問いにたいしては、マルクス主義的な資源動因論、パークのいう集団間葛藤論、社会心理学的なパーソナリティ論（権威主義者など）等、すでにいくつかの先鞭がつけられているが、デュボウ自身は本書の中ではこたえていない。それは、南アの分割労働市場から人種主義を説明するアプローチを見限って、歴史の再解釈の意義と可能性を強調するようになったデュボウにとっては自然な成り行きなのかもしれない。しかし、史的事実の通時的有効性を唱えるならば、その事実がわれわれの社会と共有するモデルに目を向けることもまた、自然な成り行きといえないことはあるまい。

解体しつくせない基盤を共有していることに気づかされるとき、自己のリアリティを支える「影」をいかにコントロールし、集合体の「影」が自己を覆う契機をいかに察知しうるのか。そして、空気のようにそれを呼吸している日々のルーティン・ワークに、デュボウの並べた史的事実がどれほど感応しうるのか。差異の実感も、それが止揚されていく契機も、ソフトに回収されていく「見えない時代」を生きる受容体が、まさにその感度を問われている。

参考文献

今福龍太『クレオール主義』1994、青土社、p.110
鵜浦裕「近代日本における社会ダーウィニズムの受容と展開」、『講座進化』1991、東大出版会、所収、pp.122-124
レックス、ジョン（鵜木眞、櫻内篤子訳）『人種主義の社会学』1987、三嶺書房、

pp.175-176
縮刷版『文化人類学事典』1994、弘文堂

（あべ　としひろ・修士課程）